

書くということ（その2）

中村 龍介

月刊誌の広告記事を引き受けてから十年以上になる。昨今の傾向として、雑誌や書籍の発行部数はデジタル書籍に押されてどんどん少なくなってきた。それでも、この雑誌の発行部数は、昨年末の数字では約四十万部で月刊誌のトップだ。広告記事といえども、1%の人がそのコラムを読んだとして、毎月四千人もの読者が私の書いたものに目を通してくれる計算だ。これは一種のスリルだが、大きな励みにもなる。

こうしてみると、半世紀近く『書くこと』に携わってきたことになるが、未だに書くためのキイポイントを掴みかねていることを告白しなければならぬ。文章を書きながら、すぐそこにある表現や言い回しを思い出せずに呻吟したり、最後まで来て上手いオチをつけるのに四苦八苦したり、苦労の連続は以前と変わりはしない。

そんな中で、文章力を少しでも向上させるために、私なりに努力していることもある。ひとつは、自分の書いたものを第三者に評価してもらうことだ。

囲碁の言葉に「岡目八目」というのがある。囲碁の対局で、実際の対局者よりも、その対局を傍で見ている見物人の方が八目先まで読むことができる、という意味だ。同じように、文章を書く場合も、実際に書いている当事者よりも、客観的に全体を眺めることができる第三者の方が文章の間違ひを見つけたり、より優れた表現を思いついたりすることが往々にしてあるのだ。

第三者に自分の書いたものを評価してもらう上で手っ取り早い方法は、物書き同人たちが集まる合評会だろう。

私は「四季の会」という集まりに参加している。男三人、女三人の六人が、毎月第四木曜日に新橋駅前にある、喫茶「ルノアール」の貸し会議室に集まる。前月に与えられた課題で原稿用紙四〜五枚程度のエッセイを書き、それを事前に電子メールで他のメンバーに送る。各メンバーは他のメンバーから送られてきた作品を事前に読んでおいて、自分の気づきをメモしておく。

会の当日、各々の作品に対して様々なコメントが寄せられる。

「この表現は間違いじゃない？」

「此处は、こう書き換えた方がスッキリしない？」

時には、目からウロコの指摘を受け、目の前が一瞬開けたように感じることもある。

とはいえ、物書きとしてはまだ卵の殻を破れないでいる自分が居る。若い時の苦労は買ってでもせよというが、私は傘寿になった今も、苦労を買いながら書いている。ただ、時には、ひとつの作品を書き上げて、その苦労に勝る達成

感を味わうときがある。それは書いた者に対するご褒美であり、それがなければ、とつくの昔に書くことを放棄していただろう。(終わり)

(下丸子在住 なかむら・りゅうすけ 日本エッセイスト・クラブ会員)

「四季の会」では新規メンバーを募集しています。興味のある方は、左記に連絡下さい。詳細な情報を提供します。

r.nakamura@nifty.com